

歴史学からみた近代京都の災害

山崎有恒（文学部教授）

はじめに

歴史学における災害史研究

政治経済史中心に進んできた研究（教科書）

～マルクス主義（発展段階説）＋ランケ史学（史料実証主義）の影響

時々起きる災害～歴史の発展要因とは考えられない

政治的事件史を中心とした歴史叙述～高校の歴史教科書（災害記述ほとんどなし）

つまり歴史形成に大きな影響を与える存在して捉えられず

もっとも遅れてきた分野、災害史

『日本災害史』『日本震災史』『関東大震災の社会史』『津波災害と近代日本』

と続く、一連の北原糸子先生の研究がパイオニア～それまで皆無といってよい状況

一方で歴史災害研究を支えてきた理工系＋地理学

理工系の特色～技術発展史に集約される傾向～例『川を制した近代技術』

地理学系の特色～災害実態、被害要因などを地図化、図式化、可視化

ここに歴史学が加わることで、何を新たな視角として付与しうるのか？

歴史学の強み～史料を用いて、人の意識と行動を明らかにする

理工系、地理学系の研究においてやや弱い、人間と災害との関係性

人は災害をどのように意識し、それとどのように向かい合ってきたのか？

問題をこのように設定した時、浮かび上がる明治維新の重要性

西欧化と近代化の中で、災害に対する人々の考え方はどのように変化したのか？

京都という街の面白さ…歴史と伝統を重んじる人々。一方で極めて流行に敏感な部分も。

（京都こそが、歴史的に流行の最大発信地であり続けた）

西欧化と近代化を積極的に推進しながら、同時にそれに対して批判的なまなざしを持ち続けた人々

近代京都の歴史災害が持つ素材としての面白さ、重要性

近代京都の歴史災害はどのように語られてきたのか？

『京都府の百年』には何がどのように取り上げられているのか？

- ① どんどん焼け（禁門の変）…幕末の戦乱の記述の中に織り込まれる
- ② 明治中期（M18&M22）の淀川水害…淀川改修運動を求める地域住民の政治運動を「地域の近代化」という枠組みでとらえる（服部敬）
- ③ 丹後大震災（S2）…丹後地方の繊維産業への影響という視点で取り上げられる
- ④ 室戸台風（S9）と翌年の諸水害…河川改修の課題が浮かび上がるも戦時体制の中で

先送りという議論

*つまり災害そのものについてまともに研究が加えられたことはなく、政治史ないしは経済史、地域史の一つのトピックとしてのみ取り上げられる

→これが歴史学における災害への関心の実情

*もっとも近年になってこの状況は若干変わりつつある

首都圏形成史学会で災害史分科会（2018 シンポジウム、2019 研究書刊行）

各県ごとに県史、市町村史、災害史、河川史などを網羅的に検討し、災害の種類・災害名・被災地域・被害の概要・人的被害・物的被害などをまとめようとしている『京都歴史災害データベース』の構築が先駆的～顧問格として参加中

↓

山崎の災害史プロジェクト＝人々の災害へのまなざしを研究対象としたもの

近代化と西欧化全盛の「近代」において、人々は災害への認識をどのように変化させたのか？（防災意識、防災思想の変化が政策・技術・システムへ与えた影響を分析）

例『近代災害史』官公庁史料編纂会編、H12

*関東大震災から有珠山噴火までの記録集。歴史的な分析なし

明治維新时期から大正期にかけての変化に注目したもの皆無

1. 近代京都の歴史災害

『京都歴史災害データベース』の作成～防災意識に注目しつつ構築

東京その他の大都市と比べて浮かび上がる京都の特徴

近世期～極めて高い住民の防災意識。町掟史料集から見える

江戸が町火消しなど公的な消防集団に依拠したのとは対照的

都市構造的に住宅密集地多し→とにかく初期消火重視

地域一丸となった防災体制構築（重い罰則規定）

*十分学ぶべきポイントあり、暗黒ではなかった江戸時代の京都

明治維新时期～小学校を中心とした地域コミュニティの再編

消防署機能を兼ね備える～ただし備品やシステムは近世町火消しのまま

（龍吐水、はしご、さすまた…）

従来の鳶集団を京都市の防災担当として雇用する案

*この時期東京は急速にポンプが導入され、西欧化に邁進する

明治中期～京都市の誕生と行政組織の整備

*次第に「民→官」へと移行していく消防（警察消防～独立消防署へ）

*近代西欧システムの導入～制服など…反発も

明治後期～西欧化・近代化の見直し時期

*旧来のシステムの優秀性再評価

マンパワー（不寝番）、住民が主体となる初期消火

* 西欧技術の不適合議論

狭い道の多い京都、水源不足、東山など高台への対応→ポンプ不要論

明治 34 年、京都市が初の蒸気ポンプ導入（大議論～後述）

* 帰結として民間主導の自治防災が大きく進展

東本願寺消防隊をはじめ、主要文化財、花街、繁華街、工場などに消防隊

なかには東本願寺のように本格的なポンプ数台を備えたものも

消火器の流布、火災保険の活発化

大正期～西欧化・近代化の徹底へ傾斜

『京都日出新聞』の主筆大道雷淵（明治生まれの新時代の旗手）

* 災害に服従するのが未開人、科学の力で克服するのが文明人

新素材（不燃材）、耐火・耐震構造の研究

昭和期～戦時体制構築優先

空襲への防備からバケツ用水の整備など、民間主導の防災システム進む

飛行場化もにらみ御池通りの拡張、河原町通りの開削など都市計画

→民間防災の強化

2. 明治 34 年の大議論

明治 34 年に京都市が上下消防署の備品として、初の蒸気ポンプ導入を決定

京都市第四十六号議案（明治 34 年 6 月 7 日提出）

帝国火災保険会社より中古のポンプ購入斡旋（ロンドン・シャンドメーソン社製）

3600 円程度のもの、2500 円で（荘林助役「望外ノ幸トスル所ナリ」）

十二番中安市会議員「先日の柵屋火災に対応できず」

* 柵屋火災～五月二十八日午後発生、街中で近くに大きな水源がなかったため、破壊

消防と手桶ポンプの併用で鎮火～こうした場所が市街の七割以上、ポンプ機能せず

荘林助役「給水方法はこれから考究予定」

四十四番栗山市会議員「順番が違う。まずその見通しを述べよ」

荘林助役「とにかく安くて良いものだから、まずは買おう」

* 結局押し切って購入決定

明治 35 年 6 月 23 日付『京都日出新聞』「三条通りの出火、原因は猫の戯れ」

21 日午後 7 時三条富小路西入雑貨商杉野直方から出火。火事の原因は親猫と子猫がじゃれ合ってランプを転倒。消火の際、京都市の蒸気ポンプが現場に出動するも、給水路なく使用不可能…

* 明治 38 年さらに一台を購入

明治 39 年 4 月 23 日付『京都日出新聞』「当市の消防設備について」

現在のところ蒸気ポンプ二台が常に出動遅れがちで、その用をなさないことから、非難が集中している

おわりに

近世期の京都が誇った高度な住民の防災意識、初期消火システム

近代化・西欧化の中で、新型のポンプに代表される機械技術導入へ集約

しかし京都の市街地に適応できないこと多し

民間の当事者意識が急速に低下、行政任せ

一方で官主導防災への疑問から、民間の消防システムが充実

これが何度も災害を組みとめる機能を生む

行政はさらなる機械化へ邁進

大正期にこうした流れが決定的になる

現在の住民防災意識～それでも他都市に比べ高い（文化財レスキュー）

聞き取りしてみると、若い人々の参加問題。未来への継承が危機的状況。

住民一人一人が火災に備え、そのための準備を怠らなかった近世江戸期の京都

歴史から学ぶべきこと